

「合格、おめでとう」

ドアを出た直後にかけられた声に、少年は身体を強張らせた。

少年はぎこちない表情でそちらを振り向くと、隣に住む「お姉さん」がそこに立っていた。

両手でパンパンに膨らんだごみ袋を持っているところから、これからごみ出しに出かける様子だった。

すぐに戻ってくる算段だったのか、特に化粧もせず、ゆったりとした部屋着に身を包んでいた。

少年は「お姉さん」を直視できなかった。俯きながら、背負っていた鞆の肩紐を手に取りながら、もじもじとしている。

「お姉さん」も、少年の様子に困った風に笑いながら、

「昨日、君のお母さんから聞いたよ。受験、受かったんだよね？」

と、もう一度、だからおめでとう、と少年に向かって祝福の言葉をかけた。

少年は、その言葉を聞いて観念したように、そっと視線を上へと向け、「お姉さん」の顔を見た。

「お姉さん」と視線が合った。

綺麗だった。

かけていた眼鏡の奥の瞳を細めて笑った「お姉さん」を、少年は綺麗だと感じていた。まるでエメラルドを思わせる鮮やかな浅緑の髪が、首を微かに傾げる「お姉さん」の仕草によって、さらりと零れる様子が綺麗だと感じていた。

そして、頭頂部でぴくりと動くモノ。それはまるで猫や犬を思わせるような耳。背後でゆったりと揺れる尾のようなものと合わせ、少年は「お姉さん」を綺麗だと感じていた。

普通の女性とは、一線を描くような存在。

ヒトのような存在。それでいて、ヒトならざる存在。

そこに当たり前のように存在し、それでいて当然のように存在し得ない存在。

それが、「お姉さん」だった。

染色をしたのではないかと疑わざるを得ない髪の色から、明らかに意思と連動している耳や尾から、少年は神秘的な美を見出していたのかもしれない。

それは、自然の見せる超自然的な自然現象や、宗教的な陶酔感に近い神秘性なのかもしれない。あるいは、妖怪や妖精でも見てしまったかのような……。

ともかく、そのような神秘性が当然のように隣に住み、少年に対して合格のお祝いを朗らかな笑顔とともに述べている。

少年の顔は、みるみる赤くなっていた。それはまるで、完熟した林檎のような赤だった。

少年は耐えかねて、ぺこりと頭を下げると、一目散に駆け出していた。呆気に取りられるように、「お姉さん」はその様子を眺めるしか出来なかった。

……。

少年は息を切らせながら、「お姉さん」の姿が見えなくなるまで走った。

走りながら、「お姉さん」の事を何度も思い返していた。

少年にとって「お姉さん」——夕焼ヒノは、歳の離れた友達のような存在だった。

共働きの両親が帰ってくるまで、夕焼ヒノと一緒にカードゲームで遊んだり、宿題に付き合ってくれることもあった。

少年が受験に臨むに当たって自然と塾に通うようになってからは夕焼ヒノと疎遠になっていったが、それでも時々会々と笑顔で挨拶してくれた。

少年にとって、ずっと優しい「お姉さん」でいるはずだった。

しかし、少年はある日知ってしまった。

それは、少年にとっての夕焼ヒノという存在を歪めてしまう、大きな秘密だった。

—。

夜の九時を回る頃である。

少年はビルの自動扉をくぐり、外に出た。

扉を出て振り返ると、ビルのガラス窓に、少年が合格した学校の名前と合格を祝う言葉が貼り出されていた。

受験を終えた後でも、少年は進学塾に通っていた。

その進学塾が思わず宣伝したくなるような名門校に合格してもなお、少年はしばらく塾で勉強がしたいと両親に頼み込んでいた。

自分から勉強がしたい、と申し出て喜ばない親はいないだろう。比較的裕福な家庭であつた少年の願いは聞き入れられる形となった。

少年はちょうど、その進学塾での学習を終えてから帰宅の途につくところだった。

冬の冷たい風に吹かれ、少年は思わず首を竦めた。

両親ともに帰宅が遅い為、迎えに来ることはまず無かった。進学塾が家から比較的近いというのも相まって、帰り道はいつも一人だった。

夜遅くまで勉強熱心で、親孝行な生徒。そういった良い評判が自然と少年についていた。

しかし、少年がこうまでして進学塾に通いたがったのには、理由があった。勉強をしたい、というのは副次的な理由であり、大きな要因は別にあったのだった。少年はまるで何かに急かされるかのように、足早に帰り道を歩く。その大きな要因は、進学塾からの帰り道にあった。

……。

街の一角に、公園がある。

住宅街の中にひっそりと佇む公園である。

何の変哲もない公園である。

強いて特徴を挙げるとするならば、比較的緑に囲まれた広々とした公園である、ということだろう。

ただ、それだけだった。

近年の安全対策の為に遊具は軒並み撤去されてしまい、残ったのはブランコと東屋程度であり、殺風景である。

背の高い木々や生垣に囲まれている為か、はたまた外灯が少ない為か、夜になると仄暗い印象があり不気味であった。

それ故に、夜にこの公園を訪れる人は皆無に等しかった。

ウォーキングやランニングのコースとしても、帰宅路のショートカットとしても滅多に利用されない。

一種の隔絶された空間となっている。

少年は、そんな公園の中にいた。

生垣に隠れるように、座り込んでいた。

時刻は間もなく夜の十時を指そうとしている頃である。

少年は両手でカイロを握りながら、時折吹く冷たい風に耐えている。

進学塾からの帰り道、少年はまだ家に帰っていないかった。

帰り道の途中にある、この仄暗い公園に真っ直ぐに向かっていたのである。

公園に到着してからは、ずっとこの生垣の影に隠れて、座り込んでいた。

この公園に到着してから、一時間は経とうとしている。

その間、公園で遊ぼうというわけでもなく――遊ぼうにも遊ぶ遊具もなく、そもそも

何かをしようとする素振りも見せない。

少年は、息を潜めていた。

この公園に存在してはいけないうように、ただただ、息を潜めていた。

時折、生垣の影から僅かに顔を出して、周囲を窺う。

そして誰もいない事を確認しては、身を縮こまらせていた。

少年がこの公園を訪れてから取る動作はこれだけだった。

誰かに見つかつてはいけないうように、振舞っている。

誰かを待っているかのように、周囲を窺っている。

冬の寒空の下、少年は朝のやり取りの事を思い出していた。

思い出すと同時に、心臓が高鳴った。

冷たくなった頬が熱くなる程、顔が赤くなるのを少年は感じていた。

少年は目を閉じて、その人の顔を思い浮かべた。

浅緑の髪を靡かせる、柔和な笑みを浮かべる女性のことを――。

がさり。

物音がした。

ぱっと瞼を開け、生垣の影から、物音の方へと視線を向けた。

視線の先に、少年が公園を訪れる理由を認め、全身が茹ってしまいそうになるような高揚感を感じていた。

少年が遅くまで進学塾に通う理由。その帰り道に公園に潜もうとする理由。

それは、視線の先にいた夕焼ヒノという女性である。

—。

少年がその事実を初めて知ったのは、夏休みが終わりに差し掛かった頃だった。

その日は受験対策の難しい問題について塾講師に質問をしたことで、いつもよりも帰りが遅くなってしまった。

早く帰りたいと思った少年は、普段は利用しない公園を通ってショートカットしようと思いついた。

両親からも学校の先生からも、夜のあの公園には近づかないように、と言われていた。しかし、この時ばかりは、僅かな冒険心も重なって、公園の中へと足を踏み入れてしまっていた。

そして、少年は目撃してしまった。

そこには、夕焼ヒノがいた。

熱帯夜である。

気怠い熱気の残る夜、夕焼ヒノは、へそが露出したショート丈のチューブトップにホットパンツという開放的な格好で、公園にいた。

少年は、はじめは見間違いだはないかと思った。

しかし、彼女の特徴的すぎる獣のような頭頂部の耳と、ゆったりと揺れる尾を見間違

える筈もなかった。

なぜ、ここにいるの。

少年は、夕焼ヒノに声をかけようとしたが、声を出すことが出来なかった。

咄嗟に、生垣の影に隠れてしまった。

何故隠れてしまったのか、少年にも説明がつかない。

声をかけられない雰囲気、この日の夕焼ヒノから感じていた。

少年が知っている、子供たちの間で流行っているカードゲームと一緒に遊んでくれる

優しい「お姉さん」ではない。

アニメや漫画で見た、何か恐ろしいもの。

それでいて、吸い込まれそうになるような、何か。

怖い、という感覚とは違う。触れたら何かが起こりそうな、危うさを孕んでいる、何か。

それを感じ取り、見てはいけないものに遭遇してしまったと悟り、咄嗟に隠れてしまったのである。

少年はまだ幼いので、その時感じた「何か」を的確に表現する術を持っていなかった。その「何か」とは、魔性であった。

少年の純粹無垢な心では計り知れない、爛れた空気を身に纏わせた「牝」の魔性であった。

見てはいけないものを見てしまった、という得体の知れない恐怖感に囚われながらも、少年は好奇心に負け、生垣の影から夕焼ヒノの様子を窺った。

そして、少年はその日知ってしまった。

夕焼ヒノの秘密を。

……。

少年は、ズボンを下ろし、下着を露出させた。

下着の上からテントが張ってしまっている程、少年は昂っていた。

少年は、下着の中に手を突っ込みながら、硬くなったペニスを弄り始める。

冬の寒い空気の中でも、身体が火照っているような錯覚さえ感じていた。

そっと、影から窺う。

視線の先には、トレンチコートに身を包んだ夕焼ヒノがいた。

辺りを一頻り見渡した後、夕焼ヒノは点々と設置された外灯の下に立った。

仄暗い公園の中で、より鮮明に夕焼ヒノを視界に捉えた少年は、カチカチになったペ

ニスを弄っていた。

それに呼応するように、夕焼ヒノは身に纏っていたトレンチコートを肩口から肌蹴させていく。

夏のあの日に見た、艶めかしい肌の露出を目の当たりにしながら、少年は手を早く動かしていく。

次第に、袖口に通した腕が、すっ、と衣擦れの音を立てると、ぱさりとその場にトレンチコートが自由落下した。

その下には、ダボっとしたパーカーをだらしなく着崩した格好をしているようだった。肩口は大きく露出するように着崩され、ファスナーはへそ当たりまで露出するように下ろされていた。

パーカーの裾リブの下からは、すらりと伸びた肢体が外灯の明かりに照らされて、より白く見えた。

それ以外に、着衣をしている様子は無かった。

冬である。

冬であるのにも関わらず、冬にあるまじき格好で、夕焼ヒノは公園にいた。

少年は、夕焼ヒノの季節外れの格好を確認し、息を荒くした。

——今日は、そういう日なんだ。

と、自分しか知らない夕焼ヒノの秘密を確認し、勃起したペニスを夢中になって弄った。

夕焼ヒノの秘密とは、深夜徘徊の露出である。

人気の無い場所に赴き、際どい格好を外気に晒す事を楽しんでいた。

際どい格好は、時に何も身に纏わない状態にまでエスカレートする事もあった。

性器を露出し、胸部を露出し、女性が取ってはいけないポーズを取って、晒け出す。

誰かに見つかるかもしれないというスリルと、バレたら大変なことになるという背徳感を、夕焼ヒノは楽しんでいた。

少年が初めてその現場に居合わせてしまった時、それまで抱いていた夕焼ヒノという存在が、大きく歪んでいった。

目を細めて笑う優しい「お姉さん」の顔が、露出をしながら妖しげに笑う「女」の顔に、刷り変わってしまったのである。

それまで見る機会の無かった女性の肌や、夕焼ヒノの行う痴態を目の当たりにして、大いに性的欲求を刺激されたのも原因の一つである。

夏の終わりの日、少年は初めて精を放った。

精通だった。

脳天を突き抜けるような、強烈な快感を味わい、しばらくの間腰を抜かして動けなくなってしまう程だった。

それほどまでに強烈なインパクトを伴って、夕焼ヒノという存在が歪んでしまった。

夕焼ヒノは、おもむろにパーカーを肩口まで半分脱ぐようにすると、少年の想像通り、肌着の類は一切身に着けていなかった。

その代わりに、水着のようなもので胸元を覆って、最低限隠す配慮だけはしているようだった。恐らくは股部分も水着を着用しているのだろう。

ひんやりとした空気の中、夕焼ヒノは自撮り棒に自身のスマートフォンを取り付け、ポーズを取るような仕草をしている。

コンビニの成人雑誌コーナーでちらりと見るようなセクシーなポージング。

手首を隠すように通した袖から覗く指が、自身の胸をまさぐり、そして絶妙に隠れた股座へと伸びていった。

少年は、女性の股間がどのようなになっているかを知らない。

自分にあるモノが、女性に無いということだけは知っているが、具体的な構造までは知らなかった。

それでも、ある程度の想像を膨らませることは出来た。

股座にあるのと無いのに限らず、ここを弄ると気持ちいいのだろうと、少年は想像がついた。

現に、今、自分が気持ちいい。すぐに天にも昇りそうな心地である。

夕焼ヒノも、きっと同じなのだろう。自ら向けたスマートフォンの視線に対して、恍惚な表情を向けているのだから。

パーカーの中に差し込んだ腕が僅かに動く様子を、少年は遠巻きにして凝視していた。袖の動きが、そのまま小刻みに動いているであろう指の動きを想像させて、少年の興奮は極致に達した。

少年は純粹無垢である為、隠語の類はとんと分らない。

このマスターベーションの果てに強烈な快感と、白くねとついた液体が手に付着している、という経験則しか表現できない。

それを、射精、だとか、イク、だとか、その類の単語で言い表す手段を持ち合わせていなかった。

ともかく、少年には迫りくる快感の高波の予感を感じ、絶妙に隠れた夕焼ヒノの股座の想像を巡らせ、息を荒げていく。

怒涛のような何かが体内から爆ぜてしまいそうな予兆に、夢中になって指を動かした。

もう少しで、少年が達してしまうところで、夕焼ヒノが大きく動いた。

その場に座り込んでしまったのである。

その座り方も、普通の座り方では無かった。

少年は歴は浅いが、剣道の心得があった。

その座り方は、蹲踞、という体勢だというのは、すぐに分かった。

しかし、通常の蹲踞とは違い、両膝を大きく左右に広げるようなものだった。

必然的に、股座は開けっ広げになってしまう。

パーカーの裾リブが大きく捲れ、脚が大きく開かれ、局部が露わになった。

外灯から降り注ぐ人工的な光の下に、初めて少年の眼前に女性の股座が晒されたのである。

残念ながら、布地で覆われているようで、白と黒のストライプ模様が股座を覆っているように、少年からは見えた。

それでも、少年にとってはあまりにも刺激的すぎるポーズだった。

大きく開かれた股を、夕焼ヒノは指で弄んでいる。

それに合わせて、少年も我を忘れて指で弄っている。

白くねとつく液体を、少年が吐き出しそうになり、もっと刺激的な光景が起こらないか、という果てのない欲望をもって夕焼ヒノに視線をくれていると……。

しあ、あああ……。

と、音が立ち始めた。

少年の理解が、僅かな間、追いつかなかった。

公園の土の上に、何かが広がっていく。

それが水だと気付いたのは、びちゃ、びちゃ、という水の跳ねる音に酷似していると

直感した時だった。

その音を奏でるのは、夕焼ヒノの大きく開かれた股座からだった。

弧を描いて、つるりとした平らな股間から地面に向かって放たれる液体。

その行為を理解した途端、少年は、あっ、あっ、と情けない声をあげながら、果ててしまった。

公園のど真ん中で、露出をしながらの放尿。

そういうことをしてはいけない、という倫理感すらも壊す背徳的な光景に、少年も公園の地面に向けて、精液を吐き出してしまっていた。

少年の思考が、射精の快感によってショートを起こし、真っ白になった。

視界のいたるところで火花が散るように眩み、身体を動かすことすら出来ない倦怠感に襲われた。

……。

生垣の影で射精を終えた少年は、まるで全力疾走をしたかのように荒くなっていた息を整えようと必死だった。

射精を終えると、太古の時代からの本能の名残から、外敵をすぐに察知しようと冷静になるのだという。

余韻に耽りながらも、急いでズボンを履き直し、その場を去ろうと準備をし始めた。射精の瞬間から、その場から逃げ出そうとした僅かな間、少年は全く他の事に気が回っていなかった。

「気持ちよかったかなあ？」

と、頭上から声が降り注がれた時、少年の心臓は飛び跳ねんばかりに強く鼓動を打った。

その方向へと振り向くと、

「んふふ、見ちゃったねえ？」

と、夕焼ヒノが、生垣の横から覗き込むようにしてこちらを見ていた。

その時、少年が見た夕焼ヒノの笑顔は、あの夏の日に見た「女」の表情だった。

—。

公園の脇にひっそりと佇む東屋。

近くには外灯も無く、夜になると屋根が月明かりも遮ってしまい、暗がりが出てくる。

その東屋の下に、夕焼ヒノは少年の手を引いて誘導した。

夕焼ヒノは少年の酷く狼狽した様子を見て、どうしてそこにいたか、何をしていたかを察していた。

察した上で、少年に対して手を差し伸べた。

少年は怯えながらも、その手を取って、今に至る。

東屋の下に辿り着く僅かな間、お互いに何も言葉を交わさなかった。

少年の手は、震えていた。

これからどうなるのか、という恐怖心もあるのだろう。

夕焼ヒノは、まずはその恐怖心を取り除くことから、手を付け始めた。

「君は、あそこで私を見ていたのかなー？」

語尾を伸ばしながら、ふんわりとした口調で尋ねると、少年はこくと小さく項垂れるようにして首肯した。

「私のことを見ながらー、君はおちんちんを、いじいじしていたのかなー？」

くすりと笑いながら少年に尋ねると、顔を真っ赤にして俯いてしまった。
それを見て夕焼ヒノは、東屋の中のベンチに腰掛けて、そっと脚を開く。

「私の、どこを見てたんだろうねえ……？　ここかなあ？　それとも、ここー？」

ベンチにだらしなく腰かけてから脚を開くと、少年の眼前に開けっ広げの局部が露出された。

それだけでなく、局部を指でくにくにと弄ったり、胸を自分で持ち上げながら揺さぶったりと、セックスシンボルを強調するような仕草を伴った。

俯いていた少年の視線が、いつの間にか夕焼ヒノのあられない様子にたちまち釘付けとなった。

恐怖心よりも、次第と性的興奮が上回っていくようだった。

その証拠に、少年のズボンがこんもりと盛り上がり始め、ひくひくと蠢いているのが、夕焼ヒノからも明らかであった。

「んふふー。お姉ちゃんから君に、合格のお祝いをあげてなかったねえ？」

そう言いながら、夕焼ヒノは、ちょいちょい、と少年を手招きした。

少年は戸惑いながらも、その誘いに招かれるように近寄った。

近付いてきた少年の手をそっと握ると、

「合格祝いに、お姉ちゃんがもっと気持ちいいお勉強を教えたいんだけど……。君、お勉強したい？」

と、そのまま少年の手首を掴み、そのまま胸元まで手を導いて、自らの胸を触らせた。何度も、何度も、柔らかな胸の感触を味わわせるように、胸に手を押し付けさせては、離させてを繰り返した。

少年は凍り付いたように、動けなくなった。

「女の子のおっぱいはねー、赤ちゃんを育てる為におっきくなるんだけど……。君にいっぱい触って気持ち良くなってもらう為でもあるんだよね？」

ぐにゅ、と指が胸の肉に沈み込むくらいに押し付けてやる。

少年はその時、違和感に気付く。

白と黒のストライプ模様の水着だと思っていた布地の感触が無かったのだ。

指が胸に触れる度に、その模様がハンカチで拭われたように滲んでいる。

「あはっ。ばれちゃった？　実はね、これ、ボディペイントなの」

と、夕焼ヒノは笑いながら、手のひらに乳首の固くなった感触を味わわせてやった。少年の手のひらを擦る蕾の感触は布地越しではなく、確かに直に感じるもので、くすぐったく、それでいて気持ちよかった。

「だからー……実は、下も……」

もう片方の手で、夕焼ヒノはパーカーのチャックを下ろしきって、前を完全に肌蹴させた。

股座を覆う布地だと思われた白と黒のストライプは、放尿の時に幾ばくか塗料が剥がれてしまったようで、じっくりと見るとじわりと滲んでいるようだった。

少年にとって、その事実が衝撃的なもので、血走りそうになる位に夕焼ヒノのそこを凝視していた。

くすくす、と笑い声をあげながら、夕焼ヒノは胸を触らせていた手を下へと滑らせていき、そっと触れさせてあげた。

「男の子のおちんちんのある場所はねー、女の子では、おまんこ、って言うんだよ？」

丘のようにこんもりと盛り上がった陰唇の上を撫でさせるように、腕を動かす。

少年の意思を介さない指の感触が、ぐにぐにと擦るように動き、夕焼ヒノは甘い吐息を漏らした。

「おまんこはね、実は穴ぼこになっててー、暖かくて、ぐにぐにゆしてて、触ると気持ちいいんだよー？」

触ってみる？ などと付け加えながら、少年の手の甲にそっと手を添えて、夕焼ヒノは少年の指を押し込むように、自身の指を押し込んだ。

少年の指は、みるみるうちに夕焼ヒノの内側へと沈み込んでいく。

指が第二関節まで沈み込むと、入り口から感じていたぬるりとした感触や、全体に纏わりつくような感触を鋭敏に感じていた。

人肌の温かさを感じるし、中はひだひだのようなものがびっしりとあるようだ、少年は感じていた。

僅かに関節を曲げると、夕焼ヒノが、あっ、と声をあげる。

そして、ひだひだが、指を、きゅう、と圧迫して離そうとしてくれなかった。

「んふふー、悪い子だねえ。お姉ちゃんのおまんこ、いじいじしちゃうなんて……」

耳元でぼそぼそと囁きながら、

「でも、いいんだよ……？ おまんこは、そういうお遊びに使う場所なんだから……」

何度も、何度も、指を抜き差しさせるように、夕焼ヒノは導く。

少年は膝を笑わせながら、夕焼ヒノに導かれるがままに、膣の中を経験する。

次第にイケナイ事だと認識していても、夕焼ヒノの囁きによって陶醉し、指の関節を曲げることに抵抗が無くなっていった。

「……もし、指でもこんなに気持ちいいおまんこの中にさー……」

わざとらしく、下腹部に力を入れて、指に適度な膣圧を味わわせながら、

「……君のおちんぽ突っ込んだら……気持ちいいと思わなあい？」

くすくす。

少年の耳元で、夕焼ヒノは笑った。
少年のズボンの下で、何度も少年のペニスがひくひくと脈打っていた。

――。

少年がズボンを脱ぐと、芳しい精の匂いが東屋のベンチに腰掛ける夕焼ヒノの鼻腔を
擦った。

下着には染みが広がっており、射精をした後もカウパー腺液が絶えず溢れ出ていたよ
うである。

少年はその下着も、おぼつかない手つきで脱ぎ捨てた。

夜の公園で二人、お互いに性器を曝け出している。

少年のペニスは、射精してもすぐに硬く、上向いていた。

成熟しきっていない少年の、精いっぱい背伸びのようで、夕焼ヒノは思わず舌なめ
ずりをしてしまっていた。

ペニスの周りに、陰毛は無かった。

つるりとした、少年の下腹部。

対して、夕焼ヒノの下腹部は、適度に整えたアンダーヘアが秘裂の上部にそっと添えられた形で生え揃っている。

本来ならば、髪の色と同じような緑色のアンダーヘアなのだろうが、そのアンダーヘアはボディペイントによって塗り潰されてしまっている。

「んふふ、おいで？」

と、白と黒のストライプ模様のボディペイントに夕焼ヒノは人差し指と中指を添え、と、くちゅり、と先程まで指で弄らせていた女性器の入り口を自ら開いて見せた。

ストライプ模様が割れ、肉々しいサーモンピンクの口が、少年のペニスを咥えようと蠢いている。

少年は、ふらふらと夕焼ヒノに抱き着くように近寄った。

「そう……。そこ……」

少年は、指で開かれた夕焼ヒノの中に向かって、ペニスを突き立てた。

初めての挿入はぎこちなかったものの、夕焼ヒノの手ほどき無しで難なく入り口を探り当て、繋がりはじめた。

「君い……センス、あるじゃん……」

亀頭がゆっくりと夕焼ヒノの中に埋まる。

「そのまま、お姉さんのほうに、腰を近付けて……。ん、ん……そうっ」

少年は、言われるがままにお互いの腰が触れ合うまで腰を突き出すと、根元までしっかりと結合した。

少年は、指で弄るよりも遥かに強い快感と、性的欲求に溺れそうになっていた。少年の小さなペニスを包む膣襞。指で感じていた幾重もの襞が、ぴっちり少年のペニスに隙間無く貼り付く。

密着して縋り付くような体勢になった少年の頭を、夕焼ヒノはそっと撫でた。

「君のはじめて、もらっちゃった」

夕焼ヒノは、少年の唇に自身の唇を重ねて、そっと微笑んだ。

少年は、はじめてをもらう、という意味が理解できなかったが、それはきっと良い事なのだろうと思うことにした。

しばらくはお互いに交合したまま、お互いの肌の温もりを隅の隅まで味わいながら、抱き合った。

ようやく少年が落ち着きだした頃を見計らって、

「それじゃあ……ゆっくり、腰を引いてご覧……？」

と、少年に対して声をかけた。

少年は夕焼ヒノの顔を間近で見つめながら頷き、ゆっくりと腰を引く。ぴっちりとは貼り付いた褌が、少年のペニスをまるでモップのように擦り上げていく。強い刺激に慣れていないのか、小さく呻きながらの動作になっていた。

「はい、ストップ。完全に抜いちゃダメよ……？」

カリ首が抜け出そうになったところで声をかける。

少年は声に従い、ぴたりと動きを止める。

まだ、カリ首が膣の中に収まった状態だった。

言う事を守れた少年に、夕焼ヒノは再び頭を撫でながら、

「抜けそうになるところまで腰を引いたら、今度はさっきみたいに、腰を近づけるの」

と、指示を出す。

少年はそれに従い、また腰を突き出す。

未熟な男の子を食べる、喰い散らかす背徳感。

純白な少年を、自分好みに染めていく背徳感。

かわいい少年と性交する背徳感。

たった一度、ピストン運動の指導をしただけで、夕焼ヒノは露出の時と同等以上の快感を味わっていた。

「腰を引いてー……。腰を近づけてー……。それを繰り返すと、気持ち良くなあい……。？」

いち、に。

と、夕焼ヒノは優しい口調で囁き始めた。

少年は利口であるから、それはリズムを取っている事に気付き、その言葉に従って腰を動かした。

本格的なセックスが、始まったのである。

少年は物覚えが早いので、初めこそリズムに合わせられずに困惑するような様子もあったが、すぐにゆったりとしたピストン運動を繰り返すことができるようになっていた。

「んっ……じょうず……。おねえさんも、君のおちんちんでおまんこほじほじされて、気持ちいいよ……？」

いち、に。

いち、に。

リズムを取る声の合間に、セックスはお互いが気持ちよくなる行為だという事を刷り込ませていく。

単調な抜き差しの中でも、少年は一生懸命になって腰を動かしていた。その健気な様子も、夕焼ヒノの欲求を満たすのに十分な要素だった。

「あ……！」

いち、に。

いち、に。

いち、に。

次第にリズムの取る声が早まっていく最中、偶然にも具合の良い箇所、少年のペニス
が擦れた。

夕焼ヒノは思わず、「女」の声を漏らしてしまった。

身体も正直に、きゅう、と少年を咥え込んだまま窄まって、大きく反応を起こす。

少年は察しが良いので、こうすると夕焼ヒノが喜んでくれる、気持ちいいんだ、と
付くことが出来た。

それを、すかさず実践する。

「あっ、あ、きみ、だめ……っ」

リズムを取る声が、途切れてしまった。

それでも少年は止まる事はなかった。

少年は夕焼ヒノを喜ばせたくて、夢中で腰を振った。

それが同時に自分の快感にも繋がると分かると、先程までの戸惑いやぎこちなさが嘘
のように、がつつき始めた。

「気持ちいい……っ。きもちいい、よ……。すご、い……」

少年のピストン運動がどんどんと激しくなっていくと、少年にねだるようにして身を委ねた。

たん、たん、たん、と小気味良く響く、肌のぶつかる音が、公園にこだまする。夕焼ヒノは、満たされていた。

少年も、同じく満たされていた。

お互いの拗れた欲情を凹凸がぴったりと重なったように感じて、この上なく幸せだった。

その幸せなひと時は、唐突に終わりを告げた。

「あっ、あ。君……？　もしかして……」

少年が腰を突き出したまま、動きを止めてしまったのだ。全身をぶるぶると、膝ががくがくと。

全てを搾り出すようにして少年は、夕焼ヒノの中に、精を放ってしまったのだ。

我慢しなくて良いよ、とか、いっぱい出そうね、とか、夕焼ヒノは耳元で囁いてやろうと思っていたが、本人もそんな事を言う余裕はとうに無かった事を悟ると、苦笑いし

た。

「んふふー……。君い、気持ちよかったかなあ？」

膣の中で、ぴこぴこと何度か脈を打つと、じわりと暖かな実感を夕焼ヒノは感じた。少年から注ぎ込まれる精液の暖かさに、昂った余韻が混ざり合って、実に心地良かった。

少年は力尽きたように、くてん、と夕焼ヒノの身体にしな垂れかかった。

しばらくの間、夕焼ヒノは少年の頭を撫でてやりながら、気をやってしまった少年をそっと抱きしめてやるのだった。

――。

「君、おはよう」

朝。

少年はまた、声をかけられた。

鮮やかな浅緑の髪を風に揺らしながら、夕焼ヒノが少年に笑いかけていた。

公園での一件の後、なかなか会う機会が減っていた。

随分と久しぶりに見た夕焼ヒノの出で立ちは、冬物のワンピースにストロールを首元を巻いているものだった。

ゆったりとしていて温かみのある清楚な格好に、少年はあの日見かけた夕焼ヒノの姿は夢か幻なんじゃないかと錯覚するほどであった。

「んふふ。君、私がこんな格好してるのが不思議、って顔してる」

図星を突かれた少年は、一本の棒のようにその場で硬直してしまっていた。

その様子を見て夕焼ヒノはくすくすと笑った。

「また、遊びにおいで、少年」

そう言い残すと、手を小さく振って、夕焼ヒノは行ってしまった。

遊びにおいで、という言葉をも、少年は何度も反芻し、どんどん顔を赤らめていく。それと同時に、あの日を経験を思い出して、むくむくと劣情を膨らませてしまってい

た。

……少年は、細かいことにも良く気付く。

なので、背を向けてさっさと行ってしまった夕焼ヒノの尾が、小刻みに何度も左右に揺れているのに気が付いた。

それは、次の機会を楽しみにしているようにも見えた。